≪活動報告≫

当財団の主要三事業のひとつ「山縣勝見賞」には、「著作賞」「論文賞」「功労賞」「特別賞」の四賞があり、毎年3～4月に受賞候補図書・論文・事業等を募集し、7月の「海の日」前後に贈呈式を行っていますが、今般、2018年に「特別賞」を受賞された谷川夏樹氏（画家）に制作の背景や意図についてご寄稿いただきましたので、ご紹介します。同氏は、コンテナや航路標識や港の設備などをキャラクター化した絵画等を発表して、海事交通文化の発展のために大いに貢献されています。

なお、「特別賞」については、従来「（ほかの）三賞に匹敵する功績が認められる個人または法人ならびにその事業」と言う対象要件を募集要領に記載していましたが、中々その対象となる事業のイメージが沸きにくいと言う指摘がありましたので、今般、巻末の「山縣記念財団からのお知らせ」で具体的なイメージを追記しました。是非そちらをご覧の上、これは、と思われる案件がありましたら、奮ってご推薦をお願いいたします。

海事広報メディエーターとしてのキャラクター
―山縣勝見賞受賞者の活動報告―

谷　川　夏　樹
（アースコンテナ／EARTH CONTAINER）

目　　次

1. コンテナくん誕生　2000年～
2. 絵本作家としての活動初期　2007年～
3. 内航船の日活動　2015年～
4. 航路標識とコンテナくん　2018年～
5. 神戸みなと物語 港への興味　2020年～

1. コンテナくん誕生　2000年～

2018 年に名誉ある山縣勝見賞 特別賞という賞をいただいたご縁で、このたび寄稿させていただくことになった。「海事交通研究」に皆さんが書かれているような立派な論文は自分には難しいため、画家としての立場でどのように海事の魅力を表現し発信してきたかを絵や写真とともに紹介していきたい。

図1　はじめて描いた「コンテナくん」

2000年、デザインの仕事の兼ね合いで頻繁に大阪港を訪れていた。コンテナターミナルが近くに

あり、眺めているうちに世界を駆け巡るコンテナ船にロマンを感じ、コンテナの色彩美や機能美に魅せられていった。もともと趣味で描いていた風景画の延長でコンテナの絵を描こうと思い立ち、不思議なことにコンテナ壁面に地球の丸をかたどった顔が思い浮かび、1 辺 1mほどの絵を描き上げた（図 1）。これを「コンテナくん」と名づけ、コンテナが世界各地を旅するシリーズの絵を描いていこうと決めた。コンテナくん活動のはじまりだ。

油彩画を中心にコンテナくんが登場する風景画の連作を制作・発表しているなかで 2007 年、運よくも東京と大阪に拠点のある老舗の画廊「ギャラリー新居」で絵を扱っていただけることになり、それまで趣味で描いていたのが一転、プロの絵描きとしての活動もはじめることができた。

また、構想当時からコンテナくんの世界観を絵の中にとどめることなく現実の世界にも広げたいという願望があり、さまざまな企業様や応援してくださる方々の協力を得て徐々に実現することができた。つまり、実物のコンテナくんを制作したのだ。図 3 は 2007 年東京・渋谷の東急文化村ギャラリー主催の現代アートのイベントに参加したときのこと。ギャラリーで展示する作品以外に実物のコンテナくんを東京都内で走らそう！ということになり、東京港大井ふ頭の一角で特別に許可を得てペイントさせていただいた。図 4 は 2011 年大阪府が主催する現代アートのイベント「おおさかカンヴァス・プロジェクト」。発表の数日前に東日本大震災が起き、このような時に展示をしている場合だろうかと悩んだ末に、世界各地から Twitter に寄せられた励ましのメッセージに感動し、その言葉を子どもたちと一緒にコンテナくんの仲間たちのキャラクター（オービッツ）の背中にメッセージを書き写した。ほかにも実物コンテナくんは兵庫、神奈川、北海道でも制作した。

図 2　最初期のコンテナくんシリーズ

図 3　東京港大井ふ頭でペイントしたコンテナくん

図 4　おおさかカンヴァス・プロジェクト

摩耶ふ頭でペイントされたキャラクター「オービッツ」とコンテナくんを大阪府の服部緑地公園で展示。コンテナくんは大阪市内を巡回した。

2. 絵本作家としての活動初期　2007 年～

2000 年からコンテナくん活動をはじめ画家としての活動を本格化させたと同時に、かねてより絵本を出したいという願望もあった。とはいえ、出版するというのは夢のまた夢の世界。そんなとき、偶然見つけたのが新風舎という出版社が主催する絵本コンテストだった。コンテナくんがハワイを旅する絵の連作をストーリー仕立てにまとめ応募したところ、7,000 件近くの応募作品のなかから受賞枠にはいり、幸運にも出版社から絵本を出版いただけることになった。これが絵本のデビュー作となった。

その後 2009 年に福音館書店の月刊絵本「おおきなポケット」の特集としてコンテナくんのストーリーを作成させていただいた。その数年後、絵本「コンテナくん」が単行本としても出版された。いわゆる物語絵本ではなく科学絵本に携わる機会をいただいたことで、社会と向き合いながら作家活動を展開する意識が高まっていった。

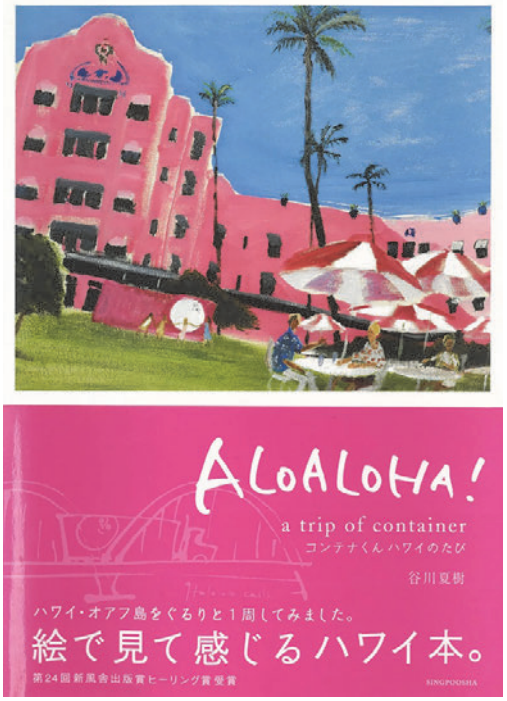

図 5　2007 年発行「コンテナくんハワイのたび」

図 6　右：絵本「コンテナくん」（福音館書店）表紙

図 7　右下：絵本「コンテナくん」（福音館書店）扉（部分）

図 8　下：福音館書店が発行する月刊絵本雑誌「おおきなポケット」2009 年 11 月号「コンテナくん」の付録。ペーパークラフト作家・和田恭侑（わだやすゆき）さんとのコラボレーションで実現した。

3. 内航船の日活動　2015 年～

福音館書店から 2 作目の絵本として内航船をとりあげることになった。三原汽船「みつひろ 7」への数回にわたる乗船取材や、様々な会社の船員さんに取材するなかで内航海運の重要性を改めて認識した。さらに船員不足の深刻さを知り、絵本の制作とは別に 7 月 15 日を語呂合わせ（715=ナイコー）で「内航船の日」にしてはどうかと SNS で呼びかけたところ反響があった。全日本内航船員の会の松見準さんはじめ有志の皆さんに協力を仰ぎ日本記念日協会に記念日申請いただき、2015 年 12 月に記念日認定を受けた。2016 年には記念日認定を記念して大阪で個展を開催し、内航船の絵を展示した。

絵本「かもつせんのいちにち」は 2018 年 3 月号として出版された。全国の応援者が内航船に興味をもって購入してくださり、一人でたくさん購入して地域の図書館などに寄贈する動きがあった。内航海運の認知度向上のために全国に点在する船処の船主団体による学校や図書館への寄贈にも発展した。販売部数は 9 万部を超え、50 年にわたる月刊絵本「かがくのとも」史上最高記録だそうだ。その後、横浜みなと博物館「絵本でたのしむ海と船」展、東京の 3331 アーツ千代田、大阪のひらかたパーク、滋賀の佐川美術館で開催された「あけてみよう　かがくのとびら」展で絵本原画や複製画が展示された。

また、全日本内航船員の会が主催となって、東京都墨田区にある押上温泉「大黒湯」で船員たちが撮影した写真を展示する「海から届ける写真展」が毎年開催され好評を博している。

図 9　「かもつせんのいちにち」表紙

図 10　「かもつせんのいちにち」の 1 シーンに登場するコンテナくん

図 11　下左：　内航船の日　記念日登録証

図 12　下中：　内航船の日キャラクター「なインコ」

図 13　下右：　海から届ける写真展 2023 年チラシ

絵本「かもつせんのいちにち」発行の翌年 2019 年、関西でも内航船の日のイベントができないかという話が浮上した。その年は偶然にも海の日と内航船の日が同じ7月15日に重なるという珍しいケースであった。一人では心もとないので海事ファンの集まりで知り合い、「内航船の日」立ち上げ時にもご協力いただいた鳥瞰図絵師の青山大介さんに 2 人展のお誘いをしたところ快く引き受けていただき、神戸海洋博物館で企画展を開催することができた。彼とは「にっぽん丸ギャラリー」のグループ展においても出品作家同士としてご縁があった。

東京の大黒湯での船員たちの写真の展示を通じて「海から陸」にメッセージを送っていたので、青山さんと私は陸にいる絵描きの立場として、逆に「海へ届ける絵画展」をコンセプトとした。お互いがそれまで手がけてきた船の絵を中心に、「内航船の日」の説明パネルを展示した。

また共通の友人で船員として活躍していた方が、その数年前に若くして路上で不慮の事故により逝去されるという痛ましい出来事があった。彼が「内航船の日」にむけて執筆した「おおきなふねのちいさなハナシ」の紹介や、彼が乗船していた LPG 船の絵を展示した。

展示がはじまると、東京会場と兵庫会場で双方に SNS 上で告知し、神戸海洋博物館の会場には東京や九州など遠方からご来場いただいた方も多かった。

「内航船の日」は X（旧 Twitter）上でハッシュタグ「#内航船の日」で検索すると、記念日当日に限らず 1 年中毎日のように船員や一般の船ファンの方々が業界や会社の枠を超えて気軽に投稿し、ときには社会課題について熱く意見交換できる貴重な場となっている。

図 14　2019 年神戸海洋博物館「海へ届ける絵画展」チラシ（表・裏）

4. 航路標識とコンテナくん　2018 年～

福音館書店での絵本 3 作目をてがける機会をいただき、かねてより興味のあった航路標識をテーマとすることにした。その背景には、毎年絶えない船舶事故や海の行楽で起こる事故を知り、子どもたちにも、海にも交通ルールが存在することを伝えたいという思いがあった。舞台に選んだのは、愛媛県の松山観光港から出港して瀬戸内海を通り、関門海峡を経て小倉港へと向かう航路。主役は貨客船・フェリーはやとも 2。ちょうど内外装が大幅リニューアルするときだった。船長にはとても丁寧に教えていただき、船員がどのように航路標識を活用しながら航行しているか理解することができた。

また、日本各地の灯台を訪れたり、防波堤灯台や灯浮標を多く訪れた。出版社の編集者とともに船上から夜間の灯浮標を撮影したり、灯浮標基地を取材したのは思い出深い。絵本の表紙に描いた北九州市の部埼（へさき）灯台へは、昼と夜と 2 回訪れた。

そうして 2021 年 2 月に月刊絵本「うみのみちしるべ」が発行された。海上保安部の教材として引き合いをいただいたり、中国での出版が決まったりと、この絵本を通じてもさまざまなひろがりを得ることができた。

絵本を複数てがけているうちに、絵本作家と呼ばれることも増えてきた。自分としては絵本の場合も絵画として鑑賞に耐えうる絵をめざしている。

図 15　絵本「うみのみちしるべ」表紙　部埼灯台

図 16　「うみのみちしるべ」に登場する
コンテナくん

図 17　個展用に描いた角島灯台とコンテナくん

5. 神戸みなと物語 港への興味 2020 年～

2020 年、コンテナくん活動 20 周年記念として、鳥瞰図絵師の青山大介さんと共同で絵本をつくろうということになった。テーマはコンテナポート神戸港の発展の歴史。日本ではじめてコンテナ荷役が行われた摩耶ふ頭からはじまり、かつてポートアイランド西側岸壁にコンテナヤードがあったときの風景、阪神淡路大震災をのりこえて神戸港が発展していく過程などを 2 人の絵を交えながら構成した。ただ、この時点では出版社も決まっておらず絵本が実現できるかどうかはわからなかった。

そんななか、描き下ろした絵画や史実資料を神戸海洋博物館の企画展として 2020 年、2021 年の 2 回にわたり展示させていただいた。絵本に登場する淡路島の江埼灯台のシーンに関する解説パネルを神戸海上保安部に寄贈させていただいたところ、江埼灯台の内部に保管・掲示いただけることとなった。

その後、企画展のアピールが実を結び、2022 年春、神戸市の小学生向けに港のことを学ぶ副読本としての発行がきまり、絵本が実現した。

図 18　六甲アイランドで余生をおくるガントリークレーンの「ガンちゃん」は、かつてポートアイランド、摩耶ふ頭で活躍していた。

図 19　小学生向けの副読本として発行された絵本「神戸みなと物語～コンテナじいさんの見た神戸港」表紙

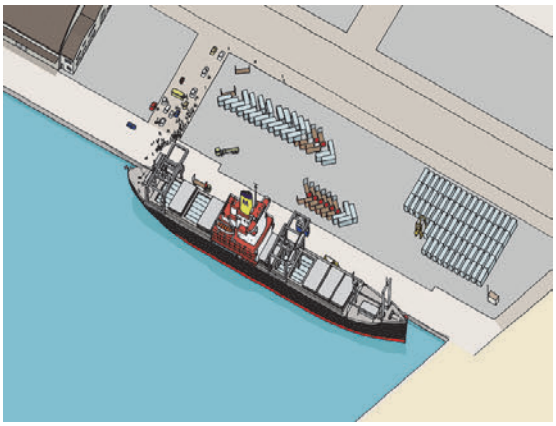

図 20　青山大介作 ハワイアン・プランター（部分）

図 21　谷川夏樹作　ハワイアン・プランター

港をモチーフとして絵本を手がけると船やコンテナだけでなく、港の設備面にも興味がある自分に気づいた。思えば、すでにナミケシくんという消波ブロックのキャラクターや係船柱のキャラクターも登場させていた。

絵本「うみのみちしるべ」にでてくる防波堤灯台も、港の一部。港湾設備のすべてには海運を発展させてきた人類の知恵が詰まっており、その機能美に惚れ込んでしまう。

2000年に発案したキャラクター「コンテナくん」は、当初は絵の題材として向き合う存在であったが、やがて活動を続けていくうちに、自分のことを「コンテナくん」と呼ぶ人が増えてきて、今となっては谷川夏樹＝コンテナくん、つまり自分の分身となっている。自らがコンテナになった気持ちで周囲を見渡すと、コンテナ船以外の船舶、港湾設備へと視野がひろがってきたというわけだ。今回の寄稿文のタイトルに「海事広報メディエーターとしてのキャラクター」とあるように、キャラクターを橋渡し役として、海事の魅力をわかりやすく社会に発信することが自分の役割だと思っている。

最後に、作家活動や絵本取材にあたり多くの企業、団体、個人の方に多大なるご協力をいただいてきた。この場をお借りしてお礼を申し上げたい。

編集者注：本誌では、原則モノクロ印刷としていますが、本稿では、画像を鮮明に伝えるためにはカラー印刷が必須と判断したことを申し添えます。

図22　キャラクター「ナミケシくん」

図23　左：東京の豊洲港で許可を得て実物の係船柱にキャラクター「らビット」をペイント
図24　右：係船柱を擬人化した「ビットくん」

図25　灯台守の子孫で日本猿のキャラクター「キヨッタ」、消波ブロックの「ナミケシくん」、係船柱の「ビットくん」